# 18［小説］あさのあつこ『のごとく』

　藩筆頭家老、の屋敷はひっそりと静まっていた。もっとも、この屋敷はいつも静かだ。下働きのまでいれると相当な人数がいるはずだが、たいてい陰気に静まり返っている。

　病人がいるせいかもしれない。

　信衛門の正室、は二人の男児を産んだがどちらもので長子は二十歳にもならぬうちに他界し、今年十八になる次男のもここ数年、寝ついたままだ。和歌子は手を尽くし、高名な医者や師を屋敷に呼び集めたけれど、効はなく、保孝はしだいにａスイジャクの度を深めている。むろん、妻も子もいない。

　嘆きや涙や死の兆しにｂオオわれた場所が暗く、陰々としてしまうのは当たり前なのかもしれない。

　は最初から樫井の屋敷にはめなかった。一生、馴染めないと思う。

　この暗さ、この重さ、このがどうにも苦しい。息が詰まる。

　樫井の屋敷の見事な長屋門をくぐるたびに、自分がｃイタンであるとなく感じてしまう。感じたからといってくも、悲しくもない。ただ、底なしに寂しくなる。

　寂しさという感情に魂が塗り潰されていくようだ。

「なんだかんだと言ったって、子は親の元に帰るもんだ。おめえのさまは樫井の殿さまよ。それだけは天地がひっくり返ってもかわらねえ。たった一人の親父さまがおめえを呼んでるんだ。知らぬ振りはできねえぜ、とう坊」

　小舞に向け急ぎ出立せよ。父信衛門からほとんどに近い手紙が届いた時、のおじじ、のはそう透馬を諭した。

「ｄジョウダンじゃねえよ。今までおれを江戸屋敷に閉じ込めといたまま見向きもしなかったくせに、今さら何言ってやがんだ。おれは、行かねえよ。江戸を離れるもんか」

「別に閉じ込められてたわけじゃねえだろう。おめえ、けっこう好き勝手に屋敷から抜け出してたじゃねえか。一日中、熊屋に入り浸ってを振り回してたのもしょっちゅうだ。とう坊、殿さまはおめえをできるだけっくうにしておいてくれたんだぜ。おが……おめえのおっかさんがよ、産まれて間もねえおめえを抱いて熊屋に帰ってきたときな、殿さまはすぐに文をくださった。母親の元で伸び伸びと育つのがこの子の幸せだろうってな」

　母の菊は人目を引くほどの佳人だったそうだが、その父親である佐吉は角ばったと太いの、いかにも頑然なをしている。しかし祖父が頑迷でも意固地でもなく、むしろさっぱりと気性のすがすがしい江戸の男であることは、よくわかっている。顔つきとはうらはらに人一倍涙もろく、優しいともわかっている。わかっているから愚痴や文句をこぼせるのだ。透馬が甘えられるのはこの祖父、ただ一人しかいなかった。

「幸せだって思うなら、ずっと伸び伸びさせてもらいてえもんさ。おじじ、親父はな、おれのことなんてどうでもいいんだ。それが証拠に国元に帰ったきり知らぬ振りじゃねえか。それがどうだ。国元にいる正室の息子たちがとして役に立たないとふんだとたん、親元に来いだと。ふざけるのも大概にしろってんだ。こちとら、将棋のじゃねえんだ。首の上に頭の乗っかってる人間なんだよ。親父の胸三寸で動かされてたまるかい」

「おれは、本当はになりたかったんだ」

　佐吉がの入ったをのぞきこみながら、ぼそりとつぶやいた。寒糊は、寒のうちに煮たを三年近く寝かせたもので、とろりと黄色味を帯びている。長年馴染んだその色が目に染みたかのように、佐吉は二度三度きを繰り返した。

「饅頭屋？」

「そうさ。ガキのころから甘いもんが大好きでよ。饅頭屋になりたかったんだ。けど、親父が経師屋への奉公を勝手に決めちまったもんだから、しょうがねえ。四の五の言うもあるもんかよ。そのままこの年まで経師屋一筋だ。饅頭とはとんと縁のねえ仕事を続けてるってわけさ」

「饅頭屋になれなかったのを悔やんでんのか」

「悔やんでなんかねえさ。親父の見立てどおり、おれは経師屋が性に合ってた。でなきゃ、四十年もやってられねえよ。おれの言いてえのはな、父親なんてみんなそんなもんだってことさ。身勝手に思えてちゃんと子どものことを考えてんだ。ちゃんと考えているようで、ちっとばかし見当外れってことも、ままあるけどよ」

「町人と武士は違う。親父は武士だ。樫井の家のことしか考えてねえよ。おじじ、おれは小舞になんて行かない。金輪際、ごめんだ」

　透馬は口を閉じ、顎を引いた。目の前を糊刷毛が飛んだのだ。それは壁にあたり、跳ね返って土間に落ちる。透馬の足先に寒糊が散って、べたりとはりついた。

「いつまで、ぐちゃぐちゃ言ってやがる」

　佐吉の怒声が仕事場に響く。をそろえていた若い職人が腰を浮かせたほどの大声だった。

「それでも熊屋の孫か。行かねえ行かねえって女々しい泣き言ばかり垂れやがって。いいかげん、性根をすえやがれ。やろうが」

　透馬は足元に転がった刷毛を拾い上げた。糊のいが漂う。

　【Ⅰ】

「透馬」

　刷毛を受け取り、佐吉はささやくように孫の名を呼んだ。

「侍をなめちゃいけねえ。まして、樫井の殿さまは食い詰め浪人とは違う。身分も力もあるお武家さまだ。そういうお方が本気になればおれたちが太刀打ちできるわけがねえんだ。殿さまがおめえを小舞に呼ぶと決めたのなら、どうしたってそうなっちまうさ。たとえおめえが逃げたって隠れたって無駄さ……無駄なんだよ」

　佐吉の肩が心なしかしぼんだように見えた。

「無駄なら、もうあがくのはやめな。泣く泣く引きずられていくんじゃねえぞ。胸をはって顔を上げて小舞に乗り込むがいいや」

「おじじ……」

「自分で自分をれんじゃならねえ。小舞に行くのがおめえの定めなら、堂々と定めに乗っかりな。おめえの母親もそうやって生きてたぜ。それにな、熊屋はずっとここにあるし、おれはずっと熊屋で経師の職人をやってる。何年たとうが変わらねえ」

　おめえが帰ってくるのを待っててやる。おそらく、そう続くだろう言葉を佐吉は飲み込んだ。の刻まれたがかすかに上下する。

　透馬は奥歯をみ締めた。

　ぎりぎりとむ音が身体の中でこだまする。重く、鈍く、濁った音だった。

　小舞に行き樫井の家を継ぐ。それは熊屋からはるか隔たることだった。江戸詰めの役職を得てしたとしても、樫井の名を背負っている以上、そうたやすくおとなうことはできなくなる。職人の孫として振る舞うなど、どんなに望んだとしても許されないのだ。

　【Ⅱ】

　透馬は熊屋が好きだった。佐吉が好きだった。

　熊屋には佐吉を親方として常時四、五人の職人が出入りしていた。住み込みの者も通いの者も流れ職人もいた。寡黙だけれどきっちりと仕事をこなす者も、でありながら見事な手際の者も、陽気なだけの半端者もいた。経師屋として一つにくくられながら個々それぞれさまざまな色合いを持つ職人たち、それを束ねる佐吉の怒声や笑いや心意気、仕事場に飛び交う軽快で他愛ない言葉たち、弾む空気、裏打ちの音、良質の糊の香り、たたき刷毛のごわごわした感触、賄い飯のたける匂い、看板障子に黒々と描かれたの絵……熊屋に生きる者が、熊屋を包み込むあらゆるものが好きだった。母が生まれ生きてきた場所だと思うとさらに心はひかれる。

　もしかしたら、武士の子ではなく経師屋の孫として生きられるかもしれない。

　【Ⅲ】

　そんな望みを本気で抱いた時期もあった。だった気のいい男が血の病とかであっけなく他界したころだ。藩邸内に一応、部屋をあてがわれてはいたが、その男が亡くなったことで透馬をかまう者はほとんどいなくなった。新たな側人がることもなく、国元の父から便りや品が届くこともない。当主の子とはいえ、母方の後ろ盾はから望めず、父親の情愛も失した庶子の行く末や今に関わろうとする者は皆無だったのだ。下屋敷だったが、熊屋の何十倍もあるだろう豪壮なの内で透馬はいつも独りだった。もっとも、邸内でおとなしく過ごすことなどほとんどなかったが。

　【Ⅳ】

　透馬は、佐吉の言うようにままに藩邸を抜け出し熊屋に入り浸っていた。めったにめられることもなく、たまに見咎められてもおざなりな説教をくらうだけですんだ。

　独り放って置かれたと嘆く気はさらさらない。むしろ心のままに動くことを黙認されたのだとしかった。だから夢を見たのだ。望みを抱いたのだ。

　もしかしたら、武士の子ではなく経師屋の孫として生きられるかもしれない。

　こんなに、あっさりとあっけなく消え去る夢とは思ってもいなかった。定めとは荒ぶれた濁浪のようなものだ。はかない願いや望みなどまばたく間に飲み込み、ｅクダいてしまう。

　【Ⅴ】

　なるほどな、確かにそうだ。己を憐れんでしゃがんでいては、やすやすと押し流されてしまうだけだ。定めの波頭に乗っかり、前に進むしかないか。

●出題校

宮城教育大学

●語注

蒲柳の質＝体が弱いこと。

下知＝命令。指図。

経師屋＝表具屋。書画の表装や襖、などを仕立てる職業。

出府＝地方から幕府のある江戸に出ること。

側人＝身分の高い人のそば近く仕える人。

■覚えておきたい語句

□２陰気……………………暗く沈んで晴れ晴れしない。

□９陰鬱……………………陰気でうっとうしいこと。

□10否応なく………………有無を言わせず。

□27うらはら………………相反していること。反対。

□31大概にする……………ほどほどにする。いい加減なこところでやめる。

□32胸三寸…………………胸の中の考え。心の中。

□46金輪際…………………どんなことがあっても。断じて。

□58太刀打ち………………張り合って立ち向かうこと。

□77寡黙……………………口数が少ないこと。⇔饒舌・雄弁

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　波線部の語句の意味として最も適当なものを次から選べ。（8点）

ア　しつこい　　イ　いいかげん　　ウ　親身　　エ　うるさい　　オ　聞きたくない

〔　　　〕

問２　樫井信衛門が透馬を江戸から小舞の自邸に呼び寄せたのはなぜか。二〇字以内（句読点を含む）で説明せよ。（8点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　小舞へ行くことを拒む透馬に、刷毛を投げつけ、「性根をすえやがれ」とした佐吉の心情として適当でないものを次から選べ。（8点）

ア　透馬が自分のもとから離れていくのは寂しいが、透馬は小舞へ行かなくてはならないと思っている。

イ　孫の透馬の人生を大事に思うがゆえに、いつまでも甘えたことを言っている透馬に腹を立てている。

ウ　小舞行きを受け入れ、自分の定めとまっすぐに向き合い、堂々と生きていってほしいと思っている。

エ　人生には思うとおりにいかないこともあり、それをも受け入れて生きていかなくてはならないと思っている。

オ　せっかく訪れた武士としての出世の機会を、みすみす棒に振ろうとしている透馬に腹を立てている。

〔　　　〕

問４　佐吉の説得を受けて、「透馬は奥歯を噛み締めた」とあるが、そこにどのような心情がこめられているか。三〇字以内（句読点を含む）で説明せよ。（8点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　本文には、次の一文が抜けている。それが入る最も適当な箇所を、本文中の【Ⅰ】〜【Ⅴ】から選べ。（8点）

堂々と定めに乗っかる。

〔　　　〕

問６　本文の内容と合致するものを次からすべて選べ。【読みのセオリー】（10点）

ア　透馬は母の死後、孤独に暮らしてきたので、突然父の都合で小舞に呼び戻されることに対して強く反発している。

イ　透馬は武士の子であることに誇りを持っていたので、自分から小舞に乗り込んでいくことにためらいはなかった。

ウ　透馬は正室の子ではないため、江戸の藩邸ではだれにも相手にされず、小舞の樫井邸でも寂しさを感じている。

エ　透馬は小舞の樫井邸で江戸を立つ前の佐吉とのやりとりを回想し、江戸を離れるのではなかったと後悔している。

オ　佐吉は孫の透馬を溺愛してきたので、透馬が武士になることを拒んでいることを内心ではむしろ歓迎している。

カ　佐吉と孫の透馬との会話が、江戸下町の職人言葉で歯切れよく展開しており、人情味豊かな世界を形成している。

キ　透馬が武士を嫌ってぐずぐず言っているので、佐吉は駄目な孫だと激怒して刷毛を投げつけ、強く叱りつけた。

ク　言葉は荒いが情理を尽くした佐吉の説得に透馬は最終的に納得し、定めに従い前に進むしかないと覚悟した。

ケ　熊屋の職人たちの中で住み込みの職人は特に優秀であり、仕事の手際があざやかで、いつも透馬は憧れていた。

コ　最初に透馬の孤独が語られ、その未来も暗黒であることが過去にさかのぼって解きあかされる構成になっている。

〔　　　　　　　　　　　　〕

【解答】

漢字　ａ衰弱　ｂ覆（われ）　ｃ異端　ｄ冗談　ｅ砕（いて）

問１　イ

問２　正室の息子にかえ、透馬をとするため。（20字）

問３　オ

問４　武士としての生を受け入れ、職人の孫としての生を断念する苦悩。（30字）

問５　【Ⅴ】

問６　カ・ク

【読みのセオリー】

★本文と対照し、根拠に基づいて、正誤を判断する

　人間は、誤読を犯しやすい。読み間違いをしないためには、本文の表現に立ち戻り、明確な根拠を探しつつ、読み進めること。

　人物の置かれている状況を、一語で決めつけてしまわず、いくつかの表現と関わらせて読み取ることが大事である。

【現代文読解用語200】

問　次の言葉の対義語をそれぞれカタカナ語で答えよ。

133デジタル⇔134［　　　　　］

135マクロ⇔136［　　　　　］

137ペシミズム⇔138［　　　　　］

139モノローグ⇔140［　　　　　］

141プロローグ⇔142［　　　　　］

143ポジティヴ⇔144［　　　　　］

145プライベート⇔146［　　　　　］

147マイノリティ⇔148［　　　　　］

【解答】

134アナログ　136ミクロ　138オプティミズム　140ダイアローグ　142エピローグ　144ネガティヴ　146パブリック　148マジョリティ

〔場面解説〕

　家老の家を継ぐために小舞に来た透馬は、樫井の家に馴染めないものを感じている。透馬は、江戸にいる時、父から小舞に来るようにとの手紙をもらい、祖父の佐吉に小舞行きを説得されたことを思い出している。

　透馬にとって江戸にいた過去は懐かしく好ましいものであり、小舞にいる現在は重苦しいもの、という対比的な描かれ方がされている。

〈作者＆出典〉あさのあつこ　一九五四（昭和29）年岡山県生まれ。青山学院大学文学部卒業。小学校講師を経て、一九九一年作家デビュー。『バッテリー』で野間児童文芸賞、『バッテリーⅡ』で日本児童文学者協会賞を受賞。児童文学から一般小説まで幅広いジャンルで活躍する。主な作品に、『ＮＯ．６』シリーズ、『晩夏のプレイボール』『あした吹く風』『夜叉桜』『冬天の』などがある。本文は、『火群のごとく』（文春文庫、二〇一〇年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

＊新問

問　10行目「樫井の屋敷の見事な長屋門をくぐるたびに、自分が異端であると否応なく感じてしまう」とあるが、透馬が、自分を「異端」と感じる理由として適当でないものを次から選べ。

ア　樫井家の庶子であるから。

イ　樫井の家で育っていないから。

ウ　父親に対する反抗心を持っているから。

エ　経師屋として生きるつもりだから。

オ　武士の家に強い執着を持っていないから。

［答］　ウ・エ

＊新問

問　33行目「おれは、本当は饅頭屋になりたかったんだ」と佐吉が語った意図はどこにあるか。最も適当なものを次から二つ選べ。

ア　自分の人生における後悔を話すことで、孫に正しい選択をして欲しいと思ったから。

イ　人生において、すべてが自分の思うとおりにはならないことをわからせるため。

ウ　経師屋になりたくてなったのではないことを、孫に教えておきたかったから。

エ　父親は、ちゃんと自分の子どものことを考えていることをわからせるため。

オ　父親は、場合によって見当はずれのことをするものだということを教えるため。

［答］　イ・エ

■小説の場面把握　★時・場・人物・事件は小説の基本

《　時　》　江戸時代

《　場　》　小舞と江戸

《人　物》　樫井信衛門（透馬の父）

　　　　　　樫井透馬

　　　　　　佐吉（透馬の祖父）

《事　件》　父の指示に従って小舞に来た透馬が、小舞に行くことをめぐって祖父の佐吉と言い争ったことを回想している。

■場面解説■

家老の家を継ぐために小舞に来た透馬は、樫井の家に馴染めないものを感じている。そして透馬は、江戸にいる時、父から小舞に来るように手紙をもらい、祖父の佐吉に小舞行きを説得されたことを思い出している。